

会員近況



慶応義塾大学
工学部管理工学科 千住 鎮雄

学校では相変わらず 経済性工学，経営工学，経営意思決定特論などを教えています。また，企業の方がたを対象にして毎年夏休みに行なっている泊り込みの1週間セミナーも今年で第14回目になりました。多くの面白いナマの問題にふれることができるので，毎年とても楽しみです。

今年は米国の某社が，自社系列の会社の Production Managers を対象としてアトランタで行なった12泊13日の社内研修会を見せてもらいました。さすがにアメリカ，カナダ，スペイン，ブラジル，日本など国際色に富んだ参加者で，朝8時半から夜おそくまで熱心に勉強していました。日本のこの種研修会と違う点は，毎日夕食前の1時間を happy hour とよんで，アルコール類が何でも一通り揃えてあり，各人が好きなものを好きなだけ飲みながら楽しげに談笑していたことでした。エンジョイしながらのハード・トレーニング！ 見事なカクテルだと思いました。

トヨタ自動車工業
生産管理部第1生産計画課 小谷 重徳

かんばん方式 入社3年目ぐらいまではOR学会の研究発表会や支部の行事に参加していたが，最近(入社6年目)はもっぱら扶養会員と化している。その間ORにかんする仕事(PERT，山崩しを用いたスケジューリングシステムの開発)，製品企画の仕事を経験し，現在は生産管理的な仕事をしている。

ところで，最近「トヨタ生産方式」が脚光を浴び，各方面に話題を提供しているようである。なかでも，「トヨタ生産方式」＝「かんばん方式」と思われるほど「かんばん」という道具を使用した生産方法に興味を示される方が多い。「ジャスト・イン・タイム」とか「自動化

などという考え方よりも，具体的手段という点に関心を寄せられるのはもっともなことである。もちろん，私がかんばん方式は非常に巧妙な方法だと感心している。私はこのかんばん方式を初めとして，トヨタ生産方式をOR的側面から眺めてみたいと思っている。とくに，かんばん方式におけるシステムの各種の挙動，たとえばかんばんに関するいろいろなパラメータとそのシステムとの関係や生産変動に対するシステムの動きなどは非常に興味あるテーマである。

東京工業大学
情報科学科 森村 英典

別刷の「実費」負担はどうすれば公平か という質問を受けことがあります。雑誌の印刷が一応終わった後で，改めて別刷分だけ刷ろうとすると，段取りに手間がかかるため，わずかな部数でも経費は高くなるし，でき上りも遅くなりがちです。ただ，でき栄えはきれいで，著者に負担してもらわなければならない実費の算定にも疑義は生じません。

一方，本来の雑誌印刷のとき別刷分も一緒に刷ってしまい，そこから必要部数だけ別刷として製本すると，かなり安くできます。この方法の難点は，部数を多く希望する人が少数で，少ない部数を希望する人が多数のときムダになる分が多く，その費用を誰かが負担しなければならぬという点です。

それでは，誰がいくらずつ負担するのが公平か，という問題は，「定式化」の絶好のテーマと考え，大学院の入試に出題してみました。時間的制約もあるためでしょう，なかなか気に入った答にめぐり合えませんでした。それでも解答の端々にOR的センスのうかがえるものもあって，この試みは一応成功したように思いました。

海上自衛隊
第51航空隊研究指導隊 森山 尚治

モデルとデータ 現在，対潜航空機等にかかわる戦術解析モデルの開発業務に従事しているが，モデルの開発において一番悩まされるのは，モデルとそれに入力するデータのレベルの関係である。戦術解析用のモデルであるため，モデル自体はミクロ的にならざるを得ないが，それ

に見合う精度のデータを求めることが必要である。近頃、ORはとかく理論中心となり、現場の意思決定に対して役に立つ情報の提供という本来の任務がおろそかになっているということが問題とされている。今回のモデルに関しても、理論的に完璧なモデルを求めるあまり、そこに入力するデータの質が、現実で得られるものと、とかくかけ離れたものになってしまいがちである。これは問題の定式化において、現状把握が不十分であるということに原因しているように思われる。ORワーカーとして十分気をつけなければならない点であろう。「モデルとデータ」は車の両輪であるということを痛感しているこのごろである。

広島大学工学部
第二類(電気系) 尾崎 俊治

文献検索 年々増え続ける学術雑誌数および掲載論文数に追いつかれて、限られた分野の文献検索もかなり大変な仕事になってきた。ORが典型的な学際的な学問であるので、当然関連するいろいろな学術雑誌にも注意しなければならない。現在自分の興味ある非常に狭い研究分野の文献検索はなんとかできても、新しい分野となるとまったくお手上げである。

新しい分野の文献検索を行なう方法としては、身近な人がその分野に精通していれば大変都合よい。不幸にしてそのような人がいない場合にはコンピュータによる文献検索がある。当広島大学においても汎用文献検索システムのHUNDREDが利用できる。また、外部のJICST理工学文献検索サービスも利用できる。しかし、シソーラスを指定して引用文献のリストを手に入れてもその数があまりに多い(たとえば、数百編)と、どの論文から読んでいいか迷ってしまう。コンピュータをあきらめてCITATION INDEX(磁気テープのほうでなく部厚い本)で直接論文を探すのもなかなかおもしろい。

広島大学総合科学部
情報行動科学教室 磯道 義典

DPに関して 私は情報科学のいろいろな分野に興味をもっております関係で現在7つもの学会に所属しております。しかし残念なことにOR方面ではまったくのシロウトですので本学会へは論文すら投稿したことがありま

せん。しかし御指名ですので最近読みましたベンツェルのダイナミック・プログラミングに関連してDPに関する個人的意見を述べてみたいと思います。

(1) DPは本質的に計算機向きの手法であり、実際にはもう少し計算機に乗せることに積極的に取り組むべきである。この場合現在の計算機がMAXやMINはとれてもそれらの値を与えた引数を取り出すことにおいて配慮がなされていない。それゆえプログラミング言語そのもの(たとえばフォートラン)の拡張も含めて考察される必要がある。(2) DPの発想とは90°ばかりずれるがDPの退化の問題(本質的にはDPがDPでなくなるケース)は重要であるからもっと研究がなされるべきである。なぜかという自然界や社会システムで安定に存在するシステムはたぶん退化したDPの構造をもっているだろうからである。

以上ORをあまり知らない人間の意見を述べてみましたが、これらの問題についてなんらかの成果がありましたらぜひ文献等お教えいただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

東海大学工学部
通信工学科 札幌校舎 浅利 英吉

なぜORか おおよそが宗教に対しても“家内安全・商売繁昌”以上のものを期待しない日本人のひとり故、私がORを使い始めたのもそんなことからです。最初は電電公社のマイクロ波通信網の保全の問題で4年間、続いて、今16才の娘がミルクを飲んでいた頃、それにまつわる家庭経済上の問題で1年間、いずれも身にふりかかる厄介事を片づけるためにORを適用しております。以来、当家の山の神と娘の連合軍や過激派学生から役所の委員会まで、トランジスタから公衆電話、田んぼの水、貨物自動車、600km四方の空域まで、いろんな問題を扱い最近はいくつかの新しい科学・技術の開発にORを利用しています。それもこれも面倒事を切りぬけて、1ばいのコーヒーと数冊の小説とマンガ本を手にとりソファで平和を楽しむ余暇を得るためです。皆様はどんな動機と目的でORに対しておられますか？